

氏 名	石野 由香里
学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 の 番 号	乙第 70 号
学位授与年月日	2017（平成 29）年 7 月 20 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	「他者をなぞるように演じる」ことを通した学生と地域住民の変容に関する研究
論 文 審 査 委 員	主査 田中 雅文 （教育学専攻 教授） 副査 清水 睦美 （教育学専攻 教授） 副査 藤田 武志 （教育学専攻 教授） 副査 中島 裕昭 （東京学芸大学 教授） 副査 関根 康正 （関西学院大学 教授）

論 文 の 内 容 の 要 旨

1.研究の目的と方法

1910 年代から現在に至るまで、教育学の分野では演劇的实践による教育的効果について様々な言及がなされてきた。しかし、演劇教育研究において、その内容は実践記録に留まりがちであるという課題を抱えていた。また、研究対象は主として小中学校の学校教育内に留まっていたという特徴があった。その結果、演じることによる自己変容の重要性は指摘されている一方で、そのプロセスに関する継時的な研究は進められてこなかった。一方で、変容に関する議論は近年の大学での学習法や、成人学習論の中でも重要視されている。

このような現状をふまえ、本研究では、学生と地域住民の意識変容に対し、「他者をなぞるように演じる」（＝他者の言動を写實的に再現する）という演劇的手法の持つ力を明らかにすることを目的とする。この目的を果たすために小目的を 2 つ設ける。第一に、「他者をなぞるように演じる」手法を体験型学習に用いた際、学生にどのような変化（学び）が起こるかを明らかにすること（研究小目的 1）。第二に、その学びを経た学生がこの手法を用いて地域で活動した際に、学生の学びはどのように深まり新たな展開を見せ、一方で、そこに参加した地域住民や地域の方、およびそれ以外の第三者にどのような変化が起こるかを明らかにすること（研究小目的 2）である。以上の目的を明らかにするために、大きく分けて 2 つの実践を研究対象とする。1 つ目は、学生のボランティア活動やフィールドワークと大学の授業内の演劇ワークショップを往還する過程（＝体験型学習）。2 つ目は、その学びを学生が日常生活や地域活動に応用する過程である。これらの過程を、エスノグラフィ

一やインタビュー調査等によって得たデータをもとに考察する。

2.論文の構成

本研究は2部構成とする。第1部では授業実践を事例に、研究小目的1について明らかにする。まず、演劇教育研究における課題点を明らかにしたうえで（第1章）、「俳優の実践を省察と変容的学習に活かすための基礎研究」（第2章）を行い、そこから明らかになった内容をもとに授業を計画・実施し、「体験型学習における省察を促す演劇的手法の計画と実践」（第3章）を通した学生の学びについて考察する。次に、第2部では学生の課外活動における実践を事例として「演劇的手法を通した学生と地域住民の学びと変容」（第4章、第5章、第6章）について考察し、研究小目的2について明らかにする。

3.各章の概要次に、各章を通じて明らかになった内容を述べる。

1章の先行研究からは、他者を演じることによる変容のプロセスに関する研究は発展的に進められてこなかったという課題が浮かびあがってきた。その理由として、その実践と研究の対象と方法が限られていたことが明らかになった。まず、対象に関しては、小中学生を中心とする学校教育における実践を主とし、社会的空間から切り離された場面で行われてきた。次に方法に関しては、プロの俳優の役作りを参照し、他者を演じることそのものを深化させる方向へは実践も研究も深まりを見せることはなかった。本研究では後述するように、実践と研究の対象と方法を拓げることで、これらの課題に答えていくことにした。

2章では、俳優の役作りにおける自己相対化のプロセスについてインタビュー調査をもとに明らかにした。そこから、身体感覚を大切にしながら役作りを深める中で、自分の心身の限界を発見することで受動的な構えが身につき、おのずと役の人物に対する自分の先入観を手放すようになるという基本的姿勢が導き出された。さらに、そのような姿勢で役作りに取り組む中で、役の人物の言動に対して「ひっかかり」を覚える（＝違和感を覚える・理解できないと感じる）段階が訪れる。そして、ひっかかりを覚えることで生じる、自他の間の葛藤を起点に「接点」を見つけることで理解の通路を見出す。そして、その過程で省察は繰り返され、自己相対化も引き起こされるという一連の流れが明らかになった。

3章では、2章で明らかになった内容を応用した授業を実践し、そこでの履修生にあらわれた変容について考察した。事例となる授業実践では、ひっかかりを感じた場面をなぞるように演じるという方法を用いた。授業の履修生3人（S,N,E）の継時的なインタビュー調査内容を Mezirow の変容的学習論を参照し、考察した結果、2つの特徴が浮かび上がってきた。1つ目は、ひっかかりを覚えるとは自らのスキームの中に収め、整理できない領域にあり、それゆえに、他者に対して自分が当てはめていたカテゴリー（＝枠組み）を相対化するための鍵となる体験であること。2つ目は、「他者をなぞるように演じる」ことで、自他の境界は危うくなるがゆえに、自分と他者について同時に深く省察することに繋がり、変容的学習を促すことである。

4 章では、学生 S が授業で学んだ手法を日常生活に応用することで、その学びはどのように深まり、新たな内容に発展していったのかを明らかにした。S は 3 章の授業において、理解できない者に遭遇した時に、自分のバイアスを用いて分かる範囲に引き寄せて理解したつもりになる自らの傾向に気づいたことから、共感にもとづく理解を相対化した。そして、日常生活の中で自分が分かったつもりになっていた人々、自分とは隔たっているために理解することは困難だと思っていた人々の両者に対して、なぞるように演じることで相手の立場に立つことができるのではないかと考え、実践していったのである。さらに、ひっかかりを覚える他者の言動に遭遇した時に、自分のバイアスを相対化し、異なる視点から見るために「他者をなぞるように演じる」手法を意識的に用いることで、自らの実践を体系化し、技法化した。

5 章では、学生 N が授業で学んだ手法を「聞きなぞり」という独自の形態へと発展させ、それを地域において実践することで、どのような学びの深まりと、観客である地域住民等の変化を促したのかを明らかにした。考察を通して、N は「他者をなぞるように演じる」手法を継続的に実践することにより、他者を分かる・分からないという枠組みを超えて、受け止めるという「聞きなぞり」独自の形態を生み出し、さらに N が媒介者になることで、N の演じている姿を観た観客は他者に対する枠組みを揺さぶられ、他者を自らと連続して捉えられる可能性を感じるようになったと考えられた。

6 章では、学生 E が授業で得た学びを活かして、あるコミュニティにおいて観客参加型の実践を試みたことにより、地域住民、およびコミュニティの場がどのように変化したのかを明らかにした。実践を通じた住民らの変容は次の 2 点に整理される。1 点目は学生や（観客から演者に転じた）住民によって演じ直される

「再現された出来事」を見ることで、いつもの自らの目線から当座離れ、現実を違う角度から見直し検討すること。2 点目は演じ手として他者の立場に立って出来事を体験しなおすことを通して、他者に対する自らの視点と、自らの言動に対する認識を省察することである。さらに、以上のような個々人の変化は相互に影響し合い、その集合体として、コミュニティの場も変化した。そして、以上の 2 点に対して、よそ者であるという立ち位置を活かした学生の媒介性が活かされていることが分かった。このように、媒介することを通して地域に何らかの働きかけをしているという形態は、学生が一方的に学ぶ場所として地域を使うのではなく、逆に支援や何かを提供することで貢献するのでもない、共に学び合う実践のあり方を示したと考えられた。

4. 本研究の結論

最後に終章では、本研究の結論を以下の 4 点にまとめた。

第一に、ひっかかりを覚える場面をなぞるように演じるという方法を体験型学習に用いることにより、学生は自他に対する思い込みを省察し、その結果、自他に対するパースペクティブは変容し得ることが分かった（研究小目的 1 に対する回答）。

第二に、その内容を日常生活に応用し、広い意味で他者と接するための普遍的な技法として体系化し、使いこなすことで、日常生活における自他の捉え方や態度に変化を与え続け得ることが分かった。さらに、自己相対化を経た演じ手が媒介者となりその方法を用いることで地域住民も変容し、コミュニティの場も変化し得ることが分かった。このように、「他者をなぞるように演じる」という手法は、実践を重ねるごとに変容する人々や場に広がりが見られ、一方で、各々の実践者の変容にも深まりが見られるというように、広がりから深まりへ発展的変容を成し遂げられる1手法として有効であると考えられる。(研究小目的2に対する回答1)。

第三に、「他者をなぞるように演じる」とは、頭で解釈するのではなく、身体を使って無心に他者をなぞることで、他者に対してあてはめていた自らの枠組みを相対化し、それまでのように先入観によって他者を捉える視点から離れられることによって、自他の見え方、捉え方が変わり、その結果、実践を行う前とは異なる形で他者を受け止められる可能性に開かれる実践であると分かった。さらに、そのような変容は、演じ手だけではなく演じ手が媒介することで観客にもおき得ることが分かった(研究小目的2に対する回答2)。

第四に、以下の3つの側面から考察することで、「他者をなぞるように演じる」実践の特長が明らかになった。これらは、研究全体の目的に対する回答となる。

1点目は変容の特長である。まず、「他者をなぞるように演じる」実践を日常生活に用いることで、他者と対面した際に自らの視点に省察的になる習慣が付き、その結果、他者との関わり方が変化し得ることが挙げられる。次に、実践を通じて他者の立場に立つことで、他者の力を借りて自分の見方が広がることもある。さらに、このように自分の見方を広げた者が媒介者となることで、他者の枠組みを揺さぶり得ることが挙げられる。

2点目として、以上のような変容を導いた実践の特長として、実在の他者を写實的に演じることと、目的を持たず無心になぞった後に省察することの2つをあげることができる。そして、そのような方法を用いることで、身体的な体験が先立ち、省察に繋がりがやすくなることが分かった。

最後に3点目として、以上の方法を先行研究でみた今日の演劇教育実践・研究と比較した際に、(社会的)文脈性をもって演じる、他者を役割に還元せずに演じる、目的を定めずに、ただなぞるという3つの側面において異なり、これらの特長があるからこそ、演じることによる自らの枠組みの相対化と日常生活への応用(実践の特長)が促されていることが分かった。

以上が、本研究を通して得られた結論である。

以上の結論は、これまでの演劇教育研究の中で研究が進められてこなかった内容である。本研究は学校教育中心に探求されてきた日本の演劇教育研究を、応用演劇の力を借りて社会教育研究へも接続する内容に発展させたと考えられる。さらにその内容は、近年の大学での学習法や、成人学習論の中でも重要視されている変容に関する研究にも寄与し得るものである。

論文審査結果の要旨

I 論文の概要

本研究は、演劇教育研究の新たな可能性を切り拓くことを目指したものである。従来の演劇教育研究は、主として初等中等教育における実践を扱い、教育目標としてのコミュニケーション力、創造力、表現力などを育成するための演劇的手法の活用と評価に焦点をあてていた。それに対し、本研究は演劇的手法を活用した大学の授業と、その授業で学んだ学生が住民と相互に影響を及ぼし合う地域社会をフィールドとし、そこでの学生と地域住民の意識変容に着目している。これによって、演劇教育研究の領域においてこれまでにない知見を生み出そうとしたのである。

本研究の目的は、上記のような学生と地域住民の意識変容に対し、「他者をなぞるように演じる」（＝他者の言動を写實的に再現する）という演劇的手法がどのような効果をもつかを明らかにすることである。そのために小目的を二つ設けた。第1に、こうした演劇的手法を取り込んだ大学の授業によってもたらされる、学生の意識変容の解明である。第2に、それらの学生がこの手法を用いて地域で活動した際、学生と地域住民の相互作用によってもたらされる、両者及び地域の変容の解明である。本研究は、これらの目的を達成するため、エスノグラフィーやインタビュー調査等によって得たデータをもとに考察したものである。

各章の概要は下記のとおりである。

1章は先行研究のレビューであり、次のことを確認した。対象面では、社会的空間から切り離された学校という場における、小中学生の活動に限定されている。方法面では、プロの俳優の役作りを参照しながら「他者を演じること」を深化させて変容までつなげる、といったアプローチの研究がほとんどない。本研究は、こうした先行研究の限界を超えることを目指している。

第1部（2～3章、研究小目的1に対応）で得られた知見は下記のとおりである。

2章では、俳優の役作りにおける自己相対化のプロセスについて、インタビュー調査をもとに明らかにした。具体的には、役の人物の言動に対して「ひっかかり」を覚える（＝違和感を覚える・理解できないと感じる）段階を経て、次に自他の間の葛藤を起点に「接点」を見つける。こうした過程で省察が繰り返され、自己相対化が引き起こされるという一連の流れを明らかにした。

3章では、上記を応用した授業の受講によって生じる変容を、3人の学生（S、N、E）のインタビュー調査から明らかにした。第1に、「ひっかかり」を覚えるという体験は、他者に関する自分の認識枠組を相対化するための鍵となる。第2に、「他者をなぞるように演じる」ことで、自他の境界の揺らぎと自己及び他者に関する深い省察が生起し、変容的学习が促される。

次に、第2部（4～6章、研究小目的2に対応）からは下記の知見が得られた。

4 章では、授業で学んだ手法を日常生活に応用した学生 S に着目し、S の学びの深化過程を明らかにした。つまり、S は日常生活で自分が分かったつもりになっていた人々、理解しがたいと思っていた人々の両者に対し、なぞるように演じることで相手の立場に立つ努力を実践していった。そして、ひっかかりを覚える他者の言動に遭遇した時は、自分のバイアスを相対化するために「他者をなぞるように演じる」手法を意識的に用い、その実践を体系化・技法化していった。

5 章では、授業で学んだ手法を地域で実践した学生 N を事例に、N の学びの深化と観客である地域住民等の変容を明らかにした。N は「他者をなぞるように演じる」手法を継続的に実践し、他者のことを「分かる・分からない」という枠組を超えて受け止める、という「聞きなぞり」独自の形態を生み出した。さらに N が媒介者になることで、N の演じる姿を観た観客は、他者に対する枠組を揺さぶられ、他者を自らと連続して捉えられる可能性を感じるようになった。

6 章では、学生 E がある地域コミュニティで試みた観客参加型の実践による地域住民の変容、さらにはコミュニティの変容の可能性を明らかにした。実践を通した住民の変容は次のとおりである。第 1 に、学生や（観客から演者に転じた）住民によって演じ直される「再現された出来事」を見ることで、現実をいつもと違う角度から見直し検討することができるようになった。第 2 に、演じ手として他者の立場に立って出来事を体験し直すことにより、他者に対する自らの視点と、自らの言動に対する認識を省察するようになった。さらに、こうした個人の変容は相互に影響し合い、その集合体としてのコミュニティも変容する可能性がうかがわれた。そして、以上の 2 点に対し、よそ者という立場を活かした学生の媒介性が効果をもつことがわかった。このように、学ぶ立場であるはずの学生が、媒介性を通して地域住民の学びにも寄与しているということにより、学生と地域住民が共に学び合う実践のあり方を示したと解釈できる。

最後に終章では、以上の分析の結果を結論としてまとめた。

第 1 に、学生のボランティア活動・フィールドワークと授業内ワークショップの往還を通して、学生が自他に対する思い込みを省察し、その結果として自他に対するパースペクティブが変容し得ることがわかった（研究小目的 1 への回答＝第 1 部）。

第 2 に、その内容を日常生活に応用することにより、自他に関する既存の枠組を相対化し、日常生活における自他の捉え方や態度に変容を与え続け得ることがわかった。さらに、自己相対化を経た演じ手（学生）が媒介者となることで、観客（地域住民）も変容し、コミュニティの場も変容し得ることがわかった。このように、「他者をなぞるように演じる」という手法により、実践を重ねるごとに変容する人々や場に広がりが見られ、一方で、各々の実践者の変容にも深まりがみられるというように、広がりや深まりからみた発展的変容を成し遂げられることがわかった（研究小目的 2 への回答＝第 2 部）。

第 3 に、以下の 3 つの側面から考察することで、「他者をなぞるように演じる」実践の特長が明らかになった。これらは、研究全体の目的に対する回答となる。1 点目は変容の特長

である。「他者をなぞるように演じる」実践を通して省察の習慣が付き、継続的な意識変容が可能になるとともに、その当事者が媒介者となって他者の意識変容にも影響を及ぼすことがわかった。2点目は、このような変容を導いた実践の特長である。それは、実在の他者を写實的に演じることと、目的を持たず無心になぞった後に省察することの二つであり、それらを支えるのが身体的な体験である。3点目として、以上の方法を従来の演劇教育実践・研究と比較すると、社会的文脈性をもって演じる、他者を役割に還元せずに演じる、目的を定めずにただなぞるという三つの特長があり、だからこそ、演じることによる自らの枠組の相対化と日常生活への応用（実践の特長）が促されているということがわかった。

II 審査結果報告

1. 総合所見

これまでの演劇教育の実践と研究は、社会空間から切り離された学校という場における児童・生徒教育の枠組から脱却することがほとんどなかった。それに対し本論文は、演劇的手法を応用することによって、大学の授業と地域社会の間を往還する学生が意識変容をたどる過程を分析することに成功している。さらには、地域住民をも意識変容の世界に招き入れ、学生と地域住民が相互に影響を及ぼしながら変容する過程を分析し、そうした変容の促進に対して演劇的手法が有効であることを実証している。これは、従来における演劇の実践と研究の限界を脱却し、新たな地平を切り拓いたものと高く評価できる。同時に、意識変容の研究分野に対しても、演劇的手法の適用という新しいアプローチを提供することとなった。

さらに、長期間にわたる学生相談・学生教育の経験の蓄積をもとに、きわめて高い独創性を有するエスノグラフィーを生み出したことは高く評価できる。しかも、厚い記述のエスノグラフィーは、そこに関わった学生や地域住民が自己相対化と意識変容の手法を獲得する過程を見事に描き出しており、実践記録としての価値も高い。

評価すべき点の具体的な内容は、2に示すとおりである。

2. 評価すべき点

<演劇教育の新たな可能性>

(1) 演劇と教育に関する先行研究と先行的な手法をふまえ、「演ずる」ということを通じた演者とそれを観る者の変容について丹念な考察を積み重ねており、「演ずる」とこととそれに関わる変容についての研究に対し、貴重な基礎的整理を行っていることが評価することができる。とくに、これまで、一般的に感じられたり、考えられたりしたことを学術的な言語で記述するという作業が十分には試みられてこなかったことは、演劇教育の分野の弱点であり、本研究はまさにこの研究上の問題点を克服するための貴重な礎を築いていると評価できる。

(2) 教育活動における新たな演劇的实践を提示したことによって、これまでの演劇的実

践や手法の意義と限界を明らかにし、演劇教育の実践と研究に関する新たな地平を示したものとして評価できる。とくに、この実践が大学の中にとどまらず、地域に開かれた協働的な実践であることは、大学における教育活動にも新たな道を拓いており価値が高い。

<意識変容の研究における有用性>

(3) フォーラムシアターの採用により、次のような効果を得ている。第 1 に、演じ手の自己相対化だけでなく、観客の自己相対化にも分析が及び、さらには、演じ手と観客の相互作用を伴うそれぞれの自己相対化過程にもおよぶ分析が行われ、意識変容の輪が広がっていく過程を描いたその厚い記述は圧巻である。第 2 に、大学の授業（学内）から社会生活（学外）へと空間的に広げるという応用だけでなく、自己相対化の過程が日常的に繰り返されることで、時間的制限のない広がりにも応用されている。

(4) 自己変容と他者了解が求められる現代社会における無関心、無理解、対立、差別が問題となる場面に対し、応用可能性が期待できる原論的研究にもなっている。その観点からとくに評価できるのは、自己変容と他者了解のプロセスのブラックボックスの中身を具体的に明らかにしたことである。そこにおいて、身体を持ってなぞるように演じることの意義が詳細に微細に記述される。身体でなぞり演じること、自他のハザマに立ち、パースペクティブ転換へと省察していくという実践原理を解明したことは高く評価できる。さらに、観客もまた自己変容と他者了解の過程に主体的に巻き込まれることを一定程度実証できたことにより、関係集団や関係地域社会の抱える大小さまざまな亀裂、齟齬、対立に対し、下から部分を全体に広げる形で変容させて問題を溶解させたり突破したりする可能性を切り開く、現実的で有力な方法の基礎論を提供している。端的に言えば、地域づくりにおける協働のあり方を支える一つの有力な方法論たり得る可能性がある。

<エスノグラフィーの独創性>

(5) 本論文は、その前史を省いても、足かけ 10 年に近い大学での学生相談及び教育の経験の蓄積から産み出されたものである。それは、演技論を通じた実践的な学習論かつ社会教育論であり、きわめて高い独創性を有するエスノグラフィーである。継時的研究であるところが、エスノグラフィーに厚みを与えている。

(6) 厚い記述によって示されるそれぞれの自己相対化の過程が、研究者の研究的財産としてあるだけでなく、その場を共有する人々にパフォーマンス・エスノグラフィーやオートエスノグラフィーといった手法のエッセンスを伝達することにもなっており、その場を共有する人々にとって形を違えどもそれぞれの財産になっていることを読み取ることができ、実践記録としての価値も十分にある。

3. 課題とされた点

(1) 分析の中で使われる「身体」「他者」「ひっかかる」「なぞる」という用語の概念規定をもっと明確にすることにより、考察の説得力が増すのではないか。

(2) 第 2 部の方法論であるフォーラムシアターという手法について、社会調査の方法と

しての意義などの検討が行われると、研究の構造がより明確になったと思われる。

- (3) プロの演技、実際の場面を他者が再現する演技、インタビューの再現としての聞きなぞり、当事者による場面の再現など、実践的にも理論的にも水準の異なる演劇的実践が混在しており、これらをさらに明確に弁別することにより、鋭い議論が可能になるとと思われる。

4. 結論

以上、審査委員によって示された上記の課題への対応が期待されるものの、審査委員は全員一致で、本論文が博士（教育学）を授与するに充分値するものと認められるとの結論に達した。